

自然の中の神

— ヘンリー・ソーロウが求めたもの —

富 永 和 元

[抄録]

ヘンリー・ソーロウのウォールデン池畔での独居生活の理由を、自然の中での神の探求と位置づけ、そのことを彼の作品『ウォールデン』の内容を中心に吟味することによって、実証しようと試みている。そして、彼がウォールデンの自然の中でどのように自分自身の神を見つけだそうとしていたのかというその方法論を推察し、証明を試みている。このことを考えることによりソーロウの思想に迫ろうとしている。

キーワード：ソーロウ，自然，神

I

ソーロウ（Henry David Thoreau, 1817-62）の自然生活の理想は、彼のウォールデンの森での生活を頂点としている。彼の自然生活には、簡素な生活の実践、自然界の動植物の研究、自然との共生などさまざまな重要な要因が挙げられるが、それにも増して彼が自然の中に求めた神性の追求というものは欠くことのできない要因であると考えられる。ソーロウのウォールデン生活は、彼が神を見いだすための実験であった。果してソーロウの神とはどんなものであり、また、彼の実験はなぜウォールデンでなされたのだろうか。この論文では、ソーロウがウォールデンの生活の実験で求めたもの、また、それがウォールデンでなされた理由、ソーロウが神を見いだすための方法論について『ウォールデン』（*Walden, or Life in the Woods*, 1854）を中心に彼の浪漫的な面と現実的な面をとおして考えてみたい。

ソーロウがウォールデンの自然に何を求めたのかを考えるうえで、まず、彼の自然に対する考え方を知る必要がある。彼の師であり、友人であるエマスン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）は著書『自然論』（*Nature*, 1836）の序章で、次のように述べている。

The foregoing generations beheld God and nature face to face; we, through their eyes. Why should not we also enjoy an original relation to the universe? Why should not we have a poetry and philosophy of insight and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs? Embosomed for a season in nature, whose floods of life stream around and through us, and invite us, by the powers they supply, to action proportioned to nature, why should we grope among the dry bones of the past, or put the living generation into masquerade out of its faded wardrobe? The sun shines to-day also. There is more wool and flax in the fields. There are new lands, new men, new thoughts. Let us demand our own works and laws and worship.⁽¹⁾

自分達以前の世代が直接見、感じていた自然や神を自分達も自分の目で見て、それらと関係を結ぼうではないかと言い、自然に抱かれ、自分達への啓示に基づく宗教を持とうとエマズンは訴えた。エマズンの『自然論』が青年ソーロウに与えた影響は大きなものだった。ソーロウは『ウォールデン』の中で「ところが、見よ！人間は自分達の道具の道具になってしまった。餓えたときには自分自分で木の実をもいでいた人間が農夫になった。木の下に立って身をかばっていた者が家持ちとなった。われわれはもはや一夜をあかすための野営をすることもなく、地上に住みついて天を忘れた。われわれは地上開墾のよりよき一方法としてキリスト教を採用した⁽²⁾」と述べている。彼は古代人が持っていた力を現代人は失っていることに気づいていた。キリスト教はもはや一つのモラルとして社会を治める道具になってしまい、本来の神と関係を結ぶ力を失ったと彼は思っていた。教会を信用しないソーロウは自分自身の神の必要性を感じた。彼もエマズンが言うように自分達の力で神を感じ、神と関係を結ぶ方法を持たなければならないと思った。ソーロウが単純にエマズンの理念を実行するためだけにウォールデンの森に入ったとは考えにくい、エマズンの自然に対する考えが彼の思想を築いていくうえでの基礎になったと思われる。このエマズンの思想を基礎としてソーロウは独自の自然へのアプローチをした。彼は、観念としてではなく、実体験として直接自然の中に宿る神性なるものの霊的交流を試みようとした。そのために彼は自分自身をウォールデンの自然の中に放り出してみた。これがウォールデン生活の実験であった。

II

ソーロウがウォールデンの森の自然に求めたものは、簡単に言うと自然の神性と永遠性であった。その両方ともが突き詰めると神を意味している。自然に宿る神性とは当然神の業のことであるし、永遠性とはその自然の後ろにいる永遠なるもの、つまり神のことをさしている。ソーロウは自然の中に神聖で永遠なものを求め、その奥に神を見いだそうとした。そのことは

彼が1851年9月7日の日記に「私の仕事は自然の中に神を見いだし、彼の隠れ家を知り、自然の中のオラトリオやオペラに出席するために、油断なく警戒することである」⁽³⁾と書いていることからソーロウが、自然の中の神を意識し、その神に会おうという意識を終始持っていたことがわかる。その神とは、汎神論的な「自然即神」というようなものではなく、またキリスト教の神、そしてギリシアや東洋の神々というような既成宗教の神でもなく、時にはキリスト教的で、時には東洋的な、漠然としたソーロウ独自の神であると考えられる。そして、彼が仕事をする場所としてはウォールデンの森が最も適していた。このことについてソーロウは次のように言っている。

The winds which passed over my dwelling were such as sweep over the ridges of mountains, bearing the broken strains, or celestial parts only, of terrestrial music. The morning wind forever blows, the poem of creation is uninterrupted; but few are the ears that hear it. Olympus is but the outside of the earth everywhere.⁽⁴⁾

ソーロウにとってウォールデンの森はそれほど彼の仕事に適した場所であった。彼にとってのオリンポスの神山とはウォールデンの森のことで、そこで俗世を離れて霊的な生活することが彼の目的であった（神に会う方法であった）。彼は彼の住みかを次のように書いた。

Both place and time were changed, and I dwelt nearer to those parts of the universe and to those eras in history which had most attracted me. Where I lived was as far off as many a region viewed nightly by astronomers. We are wont to imagine rare and delectable places in some remote and more celestial corner of the system, behind the constellation of Cassiopeia's Chair, far from noise and disturbance. I discovered that my house actually had its site in such a withdrawn, but forever new and unprofaned, part of the universe.⁽⁵⁾

ソーロウのウォールデンでの神秘的な体験をここに見ることができる。ウォールデンの森にいるときには、ソーロウには時間も、空間も、全く関係がなかった。彼は望むだけで自分の行きたい時代や場所に行くことができるような感覚に襲われた。宇宙のかなたの星の世界に神がいるとするならば、ウォールデンの彼の家はそのまま宇宙のかなたにあった。また、天地創造の時に神が現われたとするならば、彼は時代をさかのぼってその時代にまで行けるだろうと思った。彼のこの神秘体験にも似た感覚は非常に浪漫的であり、ここにソーロウの浪漫的精神が十分に現われている。また彼はウォールデン池について次のように書いている。

Not an intermitting spring! Perhaps on that spring morning when Adam and Eve were

driven out of Eden Walden Pond was already in existence, and even then breaking up in a gentle spring rain accompanied with mist and a southerly wind, and covered with myriads of ducks and geese, which had not heard of the fall, when still such pure lakes sufficed them. Even then it had commenced to rise and fall, and had clarified its waters and colored them of the hue they now wear, and obtained a patent of Heaven to be the only Walden Pond in the world and distiller of celestial dew⁽⁶⁾s.

ソーロウにとってウォールデン池は神聖なもので、「世界で唯一のウォールデン池」であり、「天の露の蒸留器であることの特許を天から与えられていた」場所であり、「アダムとイヴとがエデンの楽園を追われたあの春の朝に、ウォールデン池はすでにあった」と彼が考え、「人間の手を加えたあとはほとんど見あたらない。水は一千年前とおなじように岸をあらっている⁽⁷⁾」と言ったようにウォールデン池は彼にとって神性と永遠性の象徴であった。そんなウォールデンの森の自然の奥には神は必ずいて、神に出会う場所は時も場所も超越したそこ以外にはないと彼は考えていた。ソーロウのその思いが次の詩によく現われている。

It is no dream of mine,
To ornament a line;
I cannot come nearer to God and Heaven
Than I live to Walden even.
I am its stony shore,
And the breeze that passes o'er;
In the hollow of my hand
Are its water and its sand,
And its deepest resort
Lies high in my thought.⁽⁸⁾

ソーロウはウォールデン池畔に住んでいること以上に、神と天国に近づくことはできないと考えていた。そのウォールデンの自然の中にいるときこそ、「風景は私から展開した⁽⁹⁾」と言うことができた。これはすべての物事を中心に、現在、自分が居るという考えである。自分は、今、万物の中心である神の一番近くに居るということであり、彼はまだ自分の目には見えない神の存在を直感で感じ取っていたと言える。ウォールデンの森はソーロウにとって何物にも代えがたい教会であり、神殿であった。

『ウォールデン』の中でソーロウの思想を理解する鍵となる言葉は「目覚め」である。彼が言う「目覚め」とは、再生を意味している。「目覚め」に関して、彼は人間は目覚め、再生し、

進歩しなければならないと考えた。そして、何時も意識的な努力によって曙（「目覚め」ている）の状態を期待しなければならないと言っている。ソーロウは自分が森に行った理由を『ウォールデン』の中で次のように述べている。

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practise resignation, unless it was quite necessary. I wanted to live deep and suck out all the marrow of life, to live so sturdily and Spartan-like as to put to rout all that was not life, to cut a broad swath and shave close, to drive life into a corner, and reduce it to its lowest terms, and, if it proved to be mean, why then to get the whole and genuine meanness of it, and publish its meanness to the world; or if it were sublime, to know it by experience, and be able to give a true account of it in my next excursion.¹⁰⁹

ソーロウは人生を生きるということを最も重要に考えていた。彼は自分が生きたという証を欲した。生きるということは彼にとって「目覚めている」ということであり、詩的で神聖な生活ができる状態であることだった。彼が森に行ったのはまさに「目覚める」ためであり、ウォールデンの森こそは「目覚める」ことができる場所だと彼は考えたからであった。これはソーロウにとって重要な実験であった。彼はこの生活において、高められた真実の人生を生きること、人生の精髓を極めることを目標として掲げている。その結果がつまらないものであるか、気高いものであるかの判断を、自分の人生を実験材料にして確かめようとした。それが気高いものであったならば、当然、彼の前に神は現われるであろうし、自分の精神も神と同じ高さまで高めることができるはずだとソーロウは考えた。「神をほめ称え永遠に神を享受する」¹¹⁰という行為だけではなく、その本質に迫り、人間の「生きる」目的を見極めようと欲していた。そして、その「目覚め」の時である朝についてソーロウは次のように書いている。

The morning, which is the most memorable season of the day, is the awakening hour. Then there is least somnolence in us; and for an hour, at least, some part of us awakes which slumbers all the rest of the day and night. Little is to be expected of that day, if it can be called a day, to which we are not awakened by our Genius, but by the mechanical nudgings of some servitor, are not awakened by our own newly acquired force and aspirations from within, accompanied by the undulations of celestial music, instead of factory bells, and a fragrance filling the air — to a higher life than we fell asleep from; and thus the darkness bear its fruit, and prove itself to be good, no less than the light.¹¹²

ソーロウは朝という時を好んだ。彼にとって朝は「目覚め」の時であり特別な時間だった。しかし、時間的な朝が彼にとっての朝であったわけではなく、彼が目覚め「弾力ある力強い想い」を感じたときが彼にとっての朝であった。つまり、彼が神秘的な体験をしている時が彼にとっての朝であった。その朝を最も強く感じられる場所が彼にとってはウォールデンの森の自然の中であった。そして、彼は次のように言った。

Men esteem truth remote, in the outskirts of the system, behind the farthest star, before Adam and after the last man. In eternity there is indeed something true and sublime. But all these times and places and occasions are now and here. God himself culminates in the present moment, and will never be more divine in the lapse of all the ages. And we are enabled to apprehend at all what is sublime and noble only by the perpetual instilling and drenching of the reality that surrounds us.⁰³

人間は真理を、神の存在を、空間的にも、時間的にも、遠い所にあるもののよう⁰³に考えがちだとソーロウは言っている。それは太陽系の果てにあるのではなく、アダム以前にあるのでもなく、遠い未来にあるのでもない。永遠で、真実で、崇高な自分自身の真理（神）というものは、今、ここにあるのだと彼は言ったのである。今、ここで真理を追求すべく、最高の生活をしたならば、ここが神の世界に変わるだろうというのである。それならば、自分達はそれを見つけることに生涯を費やそうと言ったのである。ソーロウにとっては、その最適の場所はウォールデンの森であり彼はそこで自分が考える最も気高い生活をした。

ソーロウが目ざした最高の生活様式は、単純な生活であったことは『ウォールデン』の中に何度も記されている。例えば、それらは次のように述べられている「簡素、簡素、簡素！とわたしは言う、君達の問題は百とか千ではなく、二つか三つにしておきなさい。百万をかぞえる代わりに半ダースをかぞえ、あなたの親指の爪に勘定書きをつけておきなさい。」⁰⁴生活の単純化を突き詰めてゆくと最終的には原始生活に到達する。原始的な生活をする⁰⁵ことについて彼は「外面的文明のただなかにおいてさえ、原始的な辺境生活⁰⁶をしてみることは多少とも利益のあることである。生活の最低限の必要物は何であるか、それを手に入れるために用いられた方法を知るためにだけでも」と言っている。また「これらの野蛮人の丈夫さと文明人の知性を兼ね備えることは不可能なことだろうか」と自問している。ソーロウは次のように言う。

Man was not made so large limbed and robust but that he must seek to narrow his world, and wall in a space such as fitted him. He was at first bare and out of doors; but though this was pleasant enough in serene and warm weather, by daylight, the rainy season and the winter, to say nothing of the torrid sun, would perhaps have nipped his race in the bud

if he had not made haste to clothe himself with the shelter of a house. Adam and Eve, according to the fable, wore the bower before other clothes.⁰⁷

この文はソーロウの、人間の起源や原始生活への興味を示している。彼はさらに次のように言う。

Every child begins the world again, to some extent, and loves to stay outdoors, even in wet and cold. It plays house, as well as horse, having an instinct for it. Who does not remember the interest with which, when young, he looked at shelving rocks, or any approach to a cave? It was the natural yearning of that portion of our most primitive ancestor which still survived in us.⁰⁸

ソーロウは人間の生涯を人間の歴史になぞらえて考えている。人間には人間の野生本能が眠っていると彼は考えた。ゆえに、それを目覚めさせることは「原始の祖先」に戻り、そして「アダムとイヴ」の時点にも戻ることができると彼は考えた。現在の人間がより悪い、間違った方向へ向かっていると彼が考えていたとすれば、自分達よりも先へ先へと時代をさかのぼることは、よりよい人間に一步步近づくことである。そうすれば、きっと造物主である神にも出会うことができるだろうと彼は思ったのではないだろうか。ソーロウが追究した理想的人間とは、野蛮人の丈夫さと文明人の知性を兼ね備えた人間だった。言い換えれば、それは野性と知性の両立だった。ソーロウはそれができると思っていたし、それを突き詰めていくことが神へ到達する方法だと思った。

ソーロウは『ウォールデン』に次のインドの哲人の言葉を引用している。

"...One of his father's ministers having discovered him, revealed to him what he was, and the misconception of his character was removed, and he knew himself to be a prince. So soul," ... "from the circumstances in which it is placed, mistakes its own character, until the truth is revealed to it by some holy teacher, and then it knows itself to be *Brahme*."⁰⁹

この言葉を読むと、ソーロウは自分を神格であると悟ろうとしていることがわかる。彼は人間にも神性があると思っていた。彼が求めた自己とは自然の中の自分であった。ウォールデンの森を神聖な場所だと考えていたロマンチストの彼は、ウォールデンの自然の中で、簡素で気高い生活をするのは極く自然なことであったし、そこで霊的な生活をする自分は神格になれるだろうと考えていた。

Ⅲ

ウォールデンの森で神を見つけるために簡易生活を始めたソーロウは、観念としてではなく、実体験としてそれを行った。以下では彼の具体的な方法論を、以上の浪漫的なソーロウをとおして考えたのに対して、現実的な彼をとおして考えてみたい。

ソーロウがウォールデンの生活で具体的にを行ったことは、次の三つに分けられる。

- (A) 自然を深く知ること。
- (B) 自分を自然に馴染ませること。
- (C) 思索の生活をする事。

この三つについて、『ウォールデン』の中から実際にそのいくつかの例を挙げて考えたい。

(A) ウォールデン生活を始めたソーロウは、自然を深く知ろうと試みた。その対象は、まず、森の中の彼に身近な自然からであった。例えば、それは森の動物や、森の植物、池についてなどであった。彼は「春」の章で、雪が溶け出して、土砂が流れながら形を変えてゆく土手の様子を次のように克明に記録している。

The whole bank, which is from twenty to forty feet high, is sometimes overlaid with a mass of this kind of foliage, or sandy rupture, for a quarter of a mile on one or both sides, the produce of one spring day. What makes this sand foliage remarkable is its springing into existence thus suddenly. When I see on the one side the inert bank, — for the sun acts on one side first, — and on the other this luxuriant foliage, the creation of an hour, I am affected as if in a peculiar sense I stood in the laboratory of the Artist who made the world and me, — had come where he was still at work, sporting on this bank, and with excess of energy strewing his fresh designs about. I feel as if I were nearer to the vitals of the globe, for this sandy overflow is something such a foliaceous mass as the vitals of the animal body.

この雪解けの様子は、春の訪れを意味している。これは、冬の間に死んでいた自然の再生を意味している。ソーロウは、この春の訪れに、直接立ち会うことを大変好んだ。彼は「森にきて住むことの一つの魅力は、春のおとずれるを見る余暇と機会とがもてるだろうということであった」と言っている。このような自然の観察は、彼を自然の中へと引き込み、また、自分が神に近づいているという気持ちにさせた。また、彼は自分の家の近くに咲く身近な植物も、極めて注意深く観察した。

My house was on the side of hill, immediately on the edge of the larger wood, in the midst

of a young forest of pitch pines and hickories, and half a dozen rods from the pond, to which a narrow footpath led down the hill. In my front yard grew the strawberry, blackberry, and life-everlasting, johnswort and goldenrod, shrub oaks and sand cherry, blueberry and groundnut. Near the end of May, the sand cherry (*Cerasus pumila*) adorned the sides of the path with its delicate flowers arranged in umbels cylindrically about its short stems, which last, in the fall, weighed down with goodsized and handsome cherries, fell over in wreaths like rays on every side. I tasted them out of compliment to Nature, though they were scarcely palatable.²²

ソーロウはウォールデンの自然についてすべてを知ろうとした。それを調べることは神に近づくことであったし、それが彼の仕事であった。サンドチェリーを味わってみることも、彼と自然をよりよく知るための行為だった。また、彼はウォールデンを訪れるめばしい動物についても詳細に観察した。そこを訪れるめばしい動物は、ソーロウによると、「コガマス」、「スズキ類のパーチ」、「タラ類のパウト」、「銀色のシャイナー」、「ウグイ」、「ごくわずかなコイの類」、「ウナギ」、「蛙や亀の清らかな種族」、「貽貝」、「ジャコウネズミ」、「貂」、「泥亀」、「カモ」、「ガチョウ」、「白い腹のツバメ」、「オオルリ」、「ミサゴ」、「カイツブリ」であった。このようにしてソーロウはウォールデンの自然についてより詳細に知ろうとした。

森の動物や植物について観察し自然を知ろうとしたソーロウは、ウォールデン池そのものにも大いに興味を寄せた。彼は池について極めて丹念に観察していった。

Walden is blue at one time and green at another, even from the same point of view. Lying between the earth and the heavens, it partakes of the color of both. Viewed from a hilltop it reflects the color of the sky; but near at hand it is of a yellowish tint next the shore where you can see the sand, then a light green, which gradually deepens to a uniform dark green in the body of the pond.²³

これはウォールデン池の色についての彼の記述である。彼は「ウォールデンは、あるときは青く、あるときは緑である」と書いた。それは空の青と自然の緑を現わしている。彼には、この池がまるで天国と地上を繋いでいる所のように思えたはずである。ソーロウがウォールデン池について大変詳しく調べていった理由がそこにあるように思える。また、彼は池の底についても観察をすすめた。

As I was desirous to recover the long lost bottom of Walden Pond, I surveyed it carefully, before the ice broke up, early in '46, with compass and chain and sounding line. There

have been many stories told about the bottom, or rather no bottom, of this pond, which certainly had no foundation for themselves.

彼はそれまで根拠なく色々なことが言われていた池の底について丁寧に測量を行った。彼はそれまで人々が測量の苦勞をせずに、池の底がないと信じていたことに驚いた。また、ウォールデン池の深さに驚いた彼は「もし池がみんな浅かったとしたらどうだろう？ それは人間の精神に影響しはしないだろうか？ 私はこの池が、象徴として、深く清くつくられたことに感謝するものである。人が無限なものを信じるかぎり、ある池は底なしだと考えられるだろう」と言った。まだ誰も知らない池の底を突き止めたソーロウは、自分が他の誰よりも真実の自然を知ったように思ったのではないだろうか。確かに無限のものを信じる人々にとって、底のない池は必要かも知れないが、真実の自然の中に永遠を見つけようとした彼に、底の無い池は不要であった。彼は本当の自然の姿を知り、それを追究することで神に近づこうとし、その永遠を手に入れようとした。また、彼は「池の干満」を調べ、「池の出口と入口」、その「水路」の繋がりにについても調べた。

ソーロウはウォールデン池にはる氷についても詳しく観察した。それは彼が「氷は興味ある観察の対象である」と述べていることからわかる。彼はウォールデン池の氷について次のように書いている。

The pond had in the meanwhile skimmed over in the shadiest and shallowest coves, some days or even weeks before the general freezing. The first ice is especially interesting and perfect, being hard, dark, and transparent, and affords the best opportunity that ever offers for examining the bottom where it is shallow; for you can lie at your length on ice only an inch thick, like a skater insect on the surface of the water, and study the bottom at your leisure, only two or three inches distant, like a picture behind a glass, and the water is necessarily always smooth then. There are many furrows in the sand where some creature has travelled about and doubled on its tracks; and, for wrecks, it is strewn with the cases of caddis-worms made of minute grains of white quartz. Perhaps these have creased it, for you find some of their cases in the furrows, though they are deep and broad for them to make. But the ice itself is the object of most interest, though you must improve the earliest opportunity to study it.

氷がはると、それまでにはわかりにくかった池の中を調べるのに絶好の機会だった。また、池の上を行き来した動物の跡を見つけることもできた。氷は彼に自然について多くのことを教えてくれた。それは彼を自然に引き寄せた。しかし、彼が最も興味があったのは、氷それ自体

に対してであった。彼は氷について事細かに観察していった。例えば、それは「氷の色」、「氷の厚み」、「氷の下から立ち上る泡」、「その泡の直径」、「泡の数」、「泡の形」等についてだった。池の氷は、ウォールデンの森への本格的な冬の到来をも彼に教えてくれた。

ソーロウは解氷期のウォールデン池の氷についても、大変丁寧に調査していった。そのほとんどは、「春」の章の前半部分で述べられていることからわかるように池の解氷は春の到来を意味している。春が訪れると、動物達は活動を始め、森で鳥は歌い、木々は茂り、花は芽吹く。ソーロウが愛した自然が命を取り戻す。彼はウォールデン池の解氷を「死んだウォールデンがまた甦るのだ⁽²⁾」と表現している。解氷は、春の到来、自然の再生を意味していた。

ウォールデンの自然について詳しく観察したソーロウは、特にウォールデン池については最も細かく調べた。それは彼の、次のような考えによるのではないだろうか。

The phenomena of the year take place every day in a pond on a small scale. Every morning, generally speaking, the shallow water is being warmed more rapidly than the deep, though it may not be made so warm after all, and every evening it is being cooled more rapidly until the morning. The day is an epitome of the year. The night is the winter, the morning and evening are the spring and fall, and the noon is the summer.

ソーロウは、池では、一年の現象が一日のうちに起こっていると思っていた。池の傍にいと、一年の春夏秋冬を一日で感じるができると考えていたのではないだろうか。彼はウォールデンの自然を非常に愛していたが、中でもウォールデン池を最も愛していた。それは、前述したように、ソーロウにとってウォールデン池は何物にも変えがたい神聖な存在であったからである。彼は、それについてすべてを知れば、神が見えてくると思ったに違いない。ソーロウは、自然を詳細に観察した。自然をくまなく知ることは、それを作った神により近づくことを意味していた。

次に、(B) のソーロウが自分自身を自然に馴染ませた方法について考えてみたい。彼はその方法を次のように試みた。

I am glad to have drunk water so long, for the same reason that I prefer the natural sky to an opium-eater's heaven. I would fain keep sober always; and there are infinite degrees of drunkenness. I believe that water is the only drink for a wise man; wine is not so noble a liquor; and think of dashing the hopes of a morning with a cup of warm coffee, or of an evening with a dish of tea! Ah, how low I fall when I am tempted by them! Even music may be intoxicating. Such apparently slight causes destroyed Greece and Rome, and will destroy England and America. Of all ebriosity, who does not prefer to be intoxicated by

the air he breathes?⁸²

ソーロウは酒を飲まなかった。彼は朝の珈琲も、夜の紅茶も飲まなかった。彼はいつもしらふでいたいと思っていた。彼は水こそ賢者の飲み物だと思っていた。なぜならば、水を飲んでも酔うことはなく、いつも普通（しらふ）の状態であいられた。また、水ほど自然の飲み物はなかった。また彼が毎日飲むウォールデン池の水は、彼が毎日その池で水浴し、身体を清めたように、彼にとってはインド人にとってのガンジス河の水のように聖なる水であり、永遠なるものの象徴であった。彼は阿片や酒で得られる天国の幻覚などではなく、自然の水や空気によって天国に昇りたいと思っていた。彼は「一度はわたしの豆畠を荒らしたヤマネズミをぶち殺して — タタール人の言う輪廻転生を実施し — そして彼をむさぼり食った」⁸³と告白している。これも野生を求めるソーロウの一面がうかがえる文である。彼のこの行為も彼の目的への一つの実験であっただろう。彼がそれらをした理由は、それが彼にとって最も普通で自然であったからである。「人間はどんな動物よりも、あらゆる気候や境遇に自分を適応させることのできる動物である」⁸⁴とソーロウは言った。彼は大自然の中で、彼の望む生活が、自分には十分できると思った。彼はそのようにして、彼の生活の中で自然に馴染もうとし、自然の中の人間を知ろうとした。また彼は日常の生活の中でも、自然に馴染む努力をしていった。それは次のようなところから読み取ることができる。

I did not read books the first summer; I hoed beans. Nay, I often did better than this. There were times when I could not afford to sacrifice the bloom of the present moment to any work, whether of the head or hands. I love a broad margin to my life. Sometimes, in a summer morning, having taken my accustomed bath, I sat in my sunny doorway from sunrise till noon, rapt in a revery, amidst the pines and hickories and sumachs, in undisturbed solitude and stillness, while the birds sang around or flitted noiseless through the house, until by the sun falling in at my west window, or the noise of some traveller's wagon on the distant highway, I was reminded of the lapse of time.⁸⁵

ソーロウは、自分の人生に幅広い余白を持つことを愛した。その余白には豆畠の草取りや、それよりもよいことをした。それは水浴や、孤独と静寂の中での瞑想だった。また彼の試みは彼の豆畠でもなされた。そのことについて『ウォールデン』には「種蒔き、草取りをし、取入れ、打穀し、選り分け、売り — これがいちばん難しかった、そして — わたしは十分味わったのだから付け加えていいだろう — 食べることによってわたしが豆と結んだあのつきあいは奇妙な経験であった」⁸⁶と記されている。彼は豆と長くて深い関係を続けた。また、彼は「私は豆というものを知ってやろうと決心した」⁸⁷と言っている。そして、彼は「私は自分の畝と豆を

愛するようになった⁸⁸⁾」と言い、「それは大地に私をむすびつけた⁸⁹⁾」と言っている。彼は豆のすべてを知るために、実際に豆を育て、豆を食べ、豆を愛した。そうすることで、豆は彼を大地にむすびつけてくれた。また彼の豆畠への接し方は、次の部分からも読み取ることができる。

I put no manure whatever on this land, not being the owner, but merely a squatter, and not expecting to cultivate so much again, and I did not quite hoe it all once.⁹⁰⁾

ソーロウは豆畠へ肥料を施さなかったし、特別な草取りもしなかった。それは、そうすることが、彼には自然なことのように思えたからであろう。人為的な作業をできるだけ抑え、豆を作る、そして豆とごく自然な関係を持つ、そして豆に対して愛情を持つ。そうすると豆も彼を自然の一部であると認め、彼を大地にむすびつける。ソーロウはその時、大地に身体を触れている間は無限の力を得たために母なる大地の息子と言われた巨人「アンタイオスのような力を得た⁹¹⁾」と書いている。自分をアンタイオスに喩えていることから、ソーロウが自分は「母なる大地」の息子であると自覚していることがわかる。そう感じた時、彼は自分が自然により馴染んできていることを感じたに違いない。彼はそういうふうに、一步一步自然に馴染み、神に近づこうとした。

ソーロウがウォールデン生活において、できるだけ自給自足の生活をしようとしたのも、人間の根本である自然生活を意識したからであることは容易に想像できる。特に食物に関しては、その意識がよくわかる。豆畠はその一例である。彼は自分の生活の必要物に関して「こうしてわたしは、食物に関するかぎり、すべて商売や交換を避けることができたし、住居はすでに持っていたので、あとは衣服と燃料とを手に入ればよかったわけである⁹²⁾」と記述している。

彼は、特に食物に関して、非常に野生に近くなっているように感じられる。それは彼が次のように書いているからである。

I learned from my two years' experience that it would cost incredibly little trouble to obtain one's necessary food, even in this latitude; that a man may use as simple a diet as the animals, and yet retain health and strength.⁹³⁾

彼は自分の食事を簡素化することに努め、簡単な食事を取ることは動物の食事と同じようだと考えた。そして、自分が動物のように簡素な食事をとっても、動物がそうであるのと同様に健康で活力ある生活ができることを悟った。彼のその二年間の生活における主な食物は、「イースト無しのトウモロコシのひきわり」、「ジャガイモ」、「米」、「ごく少量の塩豚」、「糖蜜」、「塩」で、飲料は「水」であった。⁹⁴⁾

ソーロウは、自分を自然に馴染ませるために、実際に色々なことをした。それは酒や珈琲等を飲まず、煙草を吸わない、自然の水と空気だけの生活であったり、できるだけ的人為的手間を省いた畠作り、また、動物のような簡素な食事を取ることであった。それらの生活の共通点は、「生活の簡素化」、「自然の中での野生的な生活」の二点に要約される。そういう生活を突き詰めていくと、自分は自然と一体になり、その中にいる神とも一体になれるとソーロウは考えていた。

次に (C) の、ウォールデンでのソーロウの思索の生活について考えてみる。ソーロウがウォールデンの森で、思索のために多くの時間を当てたであろうことは『ウォールデン』の至る所から想像される。いや、『ウォールデン』そのものが、ソーロウの思索の集大成であると言っても過言ではない。敢えて例を上げるとすれば、彼は次のように言っている。

It was very queer, especially in dark nights, when your thoughts had wandered to vast and cosmogonical themes in other spheres, to feel this faint jerk, which come to interrupt your dreams and link you to Nature again. It seemed as if I might next cast my line upward into the air, as well as downward into this element, which was scarcely more dense. Thus I caught two fishes as it were with one hook.

ソーロウは思索の世界に思いを馳せた時、このような不思議な体験をした。深遠で広大無辺の宇宙創造の問題に思いを巡らしている時にも、思索は彼を再び大地へとむすびつけた。彼は宇宙創造というテーマも、大地というテーマも変わらないことに気づいた。このことを、彼は「一本の釣針で二匹の魚を吊り上げた」と言った。思索は、ソーロウにとって真理の探求であった。彼は思索の生活を送れば、すべての真理が見えてくると思った。その真理の向こう側には、神がいると思った。つまり思索の生活をするとは、神の領域まで自分の精神を高めようとするのであった。

(A) (B) (C) を総合して考えると、(A) (B) は野生の追究（大地への回帰）であり、(C) は知性の追究（精神性の向上）であった。この野生と知性の追究が、『ウォールデン』の中心思想と考えられる「より高い法則」である。以上のように、ソーロウがウォールデンの森で実際に行った生活をとおして、彼が神へ近づく具体的な方法を垣間見てきた。ここでの彼は非常に現実的に、自然の中の神に近づこうとしているのであった。

IV

ソーロウは彼の短い人生のほとんどを自然研究に費やした。彼にとっては、社会に対する関心よりも、自然への関心の方がはるかに大きかったことは明らかである。というのは、彼は自

分の神を、自然の中に発見しようとしたからであった。エマスンに共鳴した若いソーロウは、自分も自分達の神を持つ必要を感じた。そして、その神は自然の中にいるのだと彼は考えた。エマスンが「彼はまたもとのように絶えまない散歩とさまざまな研究を再開し、自然を少しでも新たに知らぬ日はありませんでした⁴³」と言ったように、ソーロウは自然を知ることに全力を尽くした。それは神に近づくためであった。ウォールデンでの簡易生活は、彼の実験生活であり、言い換えれば大きな賭けであった。

ソーロウは神に会うために、あるときは浪漫的に、あるときは現実的にウォールデンの森で原始的生活を試み、そして思索の生活をした。しかし、彼の前に神は現われなかった。現実の中に虚構を求めた彼は極めて浪漫的な人間であった。

註

- (1) Ralph Waldo Emerson, *Nature, The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*, (New York: Modern library, 1992) 3.
- (2) Henry David Thoreau, *Walden, The Writings of Henry David Thoreau*, 2nd ed., Vol.2, (Boston: Houghton Mifflin, 1906, New York: AMS Press, 1968, 1982) 41.
- (3) Henry David Thoreau, "Journal II," *The Writings of Henry David Thoreau*, 2nd ed., Vol.8, (Boston: Houghton Mifflin, 1906, New York: AMS Press, 1968, 1982) 472.
- (4) Thoreau, *Walden* 94.
- (5) Thoreau, *Walden* 97-98.
- (6) Thoreau, *Walden* 199.
- (7) Thoreau, *Walden* 206.
- (8) Thoreau, *Walden* 215.
- (9) Thoreau, *Walden* 90.
- (10) Thoreau, *Walden* 100-101.
- (11) Thoreau, *Walden* 101.
- (12) Thoreau, *Walden* 99.
- (13) Thoreau, *Walden* 107-108.
- (14) Thoreau, *Walden* 101.
- (15) Thoreau, *Walden* 12.
- (16) Thoreau, *Walden* 14.
- (17) Thoreau, *Walden* 30.
- (18) Thoreau, *Walden* 30-31.
- (19) Thoreau, *Walden* 107.
- (20) Thoreau, *Walden* 337-338.
- (21) Thoreau, *Walden* 333.
- (22) Thoreau, *Walden* 126.
- (23) Thoreau, *Walden* 196.
- (24) Thoreau, *Walden* 315.
- (25) Thoreau, *Walden* 316.
- (26) Thoreau, *Walden* 272.

- (27) Thoreau, *Walden* 344.
- (28) Thoreau, *Walden* 332.
- (29) Thoreau, *Walden* 240.
- (30) Thoreau, *Walden* 66.
- (31) Thoreau, *Walden* 70.
- (32) Thoreau, *Walden* 123-124.
- (33) Thoreau, *Walden* 178.
- (34) Thoreau, *Walden* 178.
- (35) Thoreau, *Walden* 171.
- (36) Thoreau, *Walden* 171.
- (37) Thoreau, *Walden* 60.
- (38) Thoreau, *Walden* 171.
- (39) Thoreau, *Walden* 71.
- (40) Thoreau, *Walden* 68.
- (41) Thoreau, *Walden* 67.
- (42) Thoreau, *Walden* 194-195.
- (43) Ralph Waldo Emerson, "Thoreau," *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*, (New York: Modern library, 1992) 809.

主要参考文献

- Bloom, Harold. ed. *Henry David Thoreau*. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- , ed. *Henry David Thoreau's Walden*. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Edel, Leon. *Henry D. Thoreau*. Toronto: University of Minnesota Press, 1970.
- Hildebidle, John. ed. *Thoreau: A Naturalist's Liberty*. Harvard University Press, 1983.
- 東山正芳著, 『ソーロウ研究』 東京 弘文堂, 昭和36年.
- , 『ヘンリー・ソーロウの生活と思想』 東京 南雲堂, 1972.
- Hovey, Allen beecher. *The Hidden Thoreau*. New York: AMS Press, 1966.
- 尾形敏彦著, 『エマスンとソーロウの研究』 東京 風間書房, 昭和47年.
- Richardson Jr, Robert D. *Henry Thoreau: A Life of the Mind*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1986.
- Ruland, Richard. ed. *Twentieth Century Interpretations of Walden*. Englewood Cliffs, New Jersey: A Spectrum Book, 1968.

(とみなが わげん 文学研究科英米文学専攻博士後期課程) (1996年10月16日受理)